

意見交換の概要
(平成 30 年 6 月 19 日(火)・鬼北町近永公民館)

1. 子どもたちへのスポーツ教育、プロスポーツへの支援及び南予地方の高校の部活動の特色づくり等について

私たちは45歳までの起業家の集まりで、現在、宇和島商工会議所、70名ほどで活動している。その中で、子どもたちに対するスポーツ面での支援ということで、YEG杯、中学校軟式野球大会をここ十数年開催している。昨年度、えひめ国体があったが、子どもたちに対するスポーツの教育について、これからどういうふうやっていくのかぜひ聞かせていただきたい。

それから現在、野球、サッカー、バスケットボールのプロ球団があるが、やはりこういったことも県として引き続き御支援をいただきたい。

あと、県立高校の生徒数は、南予地域では現在宇和島東高校が1番人数が多く、ほかの学校は、やはり私たちが高校に在学していたときの半分以下に減っているのかなという状況もある。しかし、今スポーツ面で活躍している子が、松山の私立に行っている状況があるのではないかと感じており、南予の高校の活性化を求めるのであれば、外部に出て行かないようなシステム、取組みというのも必要ではないかなと考えている。

さらに、プロスポーツと先ほど申し上げたが、子どもたちがワクワク、ドキドキしながら見ていただくということと、今、健康指向であるということで、健康にもつながっていくような取組みも必要ではないか。そしてこの中でもやはり野球の位置づけというのがかなり愛媛県には関わってくるのではないかと考えている。皆さん御存じのように野球という言葉は正岡子規がつくった言葉で、また、甲子園において夏將軍であるとか、センバツ初出場というような言葉は、高校野球を知っている方は愛媛県を連想するのではないかと思う。こういった南予地方における高校の部活動の特色といった面においてもぜひ考えていただきたい。

【知事】

昨年は、国体・えひめ大会があって、スポーツの魅力を多くの方々共有した1年ではないかなと思っています。幸い、これから東京オリンピックもありますので、スポーツ熱というのはますます高まっていくだろうと思っているのですが。

実はその中で子どもたちのアスリート育成ということに関しましては、3年前から新たな事業を興しています。これは“えひめ愛顔のジュニアアスリート発掘事業”という将来アスリートの発掘をする事業ですね。ただ、これは公平性が大事ですから誰でもがチャレンジできる仕組みになっています。毎年約3,000人、東中南予の小学生がチャレンジしています。1次選抜の体力測定でだいたい200人ぐらいに絞り込んで、そこからいろいろなもう少し専門的な運動能力の確認をし、最終的に50人ぐらいに絞り込みます。そして、選考されたジュニアアスリートたちに最長5年間あらゆる競技に共通する基礎体力づくり、基礎トレーニング手法といったものを中心に指導し、それからいろいろな競技にチャレンジしてもらいます。跳ぶ、投げる、打つ、組む、走る。いろいろな競技をやらせてもらって特性を見極めていきます。この段階に入っていきますと県内の各競技団体の役員も御参加いただきまして、その子どもたちの見極めをしていただきます。並行して親御さんにもアスリートを育てるためのサポート体制の構築であるとか、あるいは食生活へのアドバイスといったことも指導してまいります。もう1つ特徴的なのはメンタル。競り合ったときにはメンタルが勝負を決めていきますので、早い段階でメンタルのトレーニングも体験していただきます。最終的に見極めをして、君は、あなたは、この種目をやったら十分に全国のトップあるいは世界に通用する選手になる可能性がありますよというアドバイスをします。その道を選択する場合があります。でも、やっぱりこっちやりたいとそっちじゃない道を選ぶ場合も

あります。それは自由です。あくまでもアドバイスですから。

こういった事業をやっているんですが、すでにこの中から自転車競技やラグビー女子等々で全日本の選手が生まれ始めました。すぐに結果が出るわけではないですが、きっと10年経ったら、このジュニアアスリート発掘事業の子どもたちの中からその種目ごとの全国レベルあるいはオリンピック選手などが愛媛から生まれてくるのではないかと期待しています。

ただ、一般的なクラブ活動については、今、過渡期でして、教育現場においてゆとり教育がまた変わってきましたので、先生の負担が非常に多くなってきている。これは国のほうでクラブ活動がどうあるべきなのかというそもそもの議論が始まっていますので、その国の制度の変更や、あるいは今愛媛県ではスポーツ専門員という方々に来ていただいていますので、その人たちに効果的に指導していただくとか。いろいろなことを考えていきたいなと思っています。ただ、方向性として松山市でも一部出てきていましたが、地域型スポーツクラブという形がこれから生まれていくのかなど。学校クラブ活動とは別で。そういう形が模索されていく可能性はあるのではないかと考えています。

次にプロスポーツですが、実はこれ全部いきさつ上関わってきた経緯がありまして、例えば愛媛FCというのは、JFLの時代、当時、社長、役員たちみんな私たちの仲間たちでやっていて、本当にJを目指すのというところの時代でした。当時、松山市の仕事をしていましたが、県と市が一体となってサポートしようということで、J2に上がる最後の試合というのは、今でも忘れられませんけれども、本当に感動的なシーン。これに勝てばJ2昇格というような試合も目の前で見させていただきました。以来、もう10年以上経ちますが、本当にいいときもあれば悪いときもある。今、どん底ですけども。ともかく大変なのは資金集め等々であります。これについては、愛媛県と全市町が出資してサポートしていく体制を取っていますけど、それだけではとてもじゃないけど足りないの、直接私のほうから企業にお願いすることもあるんですが、可能な限り、どっかの大きな企業がボンというわけではないので、本当に県民が支えるというチームですから、ぜひ皆さんサポートよろしくお願ひいたします。

それからマンダリンパイレーツは当時、石毛さんという方がアメリカの独立リーグみたいなものを日本でやりたいと。そこに野球熱の高い四国を選びたいということでやってきたのが平成11年ぐらいだったと思います。この人もまた夢見る少年のような方で、ともかくあれよ、これよ考えてもしょうがないからスタートするということから始まりました。これも本当に愛媛FCと同じように運営上の難しい問題を抱えて、途中で社長も交代していただいて、今の社長さんがともかくきっちりとした経営というものを持ち込んで、カツカツながらも何とか黒字経営で球団を運営してくれています。このマンダリンパイレーツというのは独立リーグでプロ野球、NPBのドラフトにかからなかった選手たちが集まって来ています。彼らは一芸には秀でています。例えば150キロ以上の球は投げられるけど、コントロールはでたらめだとか。めちゃくちゃに足が速いけど空振りばかりだとか。何か欠けているからNPBドラフトにかからなかった連中ですね。でも、能力高いんです。みんな甲子園も経験していますし。だから、よく彼らに言うのは、この舞台というのはNPBへの最後の挑戦を夢見て青春をはじけさせる舞台であると同時に、最終的に野球を諦める場所でもある。どっちかしかないんだと。だから日々日々が勝負だよということで、多分、プロとはいえ月給10万円ぐらいでやっていますよ。それぐらいのカツカツの生活の中で、周りの人たちが米を差し入れたり、肉を食えとか、そんな形で頑張っているのが実態でありますので、こちらでも1人でも多くプロのNPBへの道が開かれたらなということを夢見てサポートしていきたいと思っています。

それからバスケットは、たまたま私の仲間の河原学園の息子さんが大分の地域大会行って、本当にやれるのって言ったら、バスケットは野球やサッカーほど人数多くないですから、やり方によっては十分にやれるというのが彼の判断なんですけど、まだまだそこまでいっていません。ただ、これは1回試合を見たら引きずり込まれると思います。非常に身近なところですから。野

球やサッカーはちょっと遠くですけど、目の前で2メートルクラスの外人も含めた連中がバシンバシン、ダンクシュートをぶちかまして、応援もアメリカ的でチアガールがどんどん出てきている。ワイワイ、ワイワイやるという。ある意味ではレジャーのような感覚でストレス解消にはもってこいの空間がそこに待っていますので、ぜひ南予に来たときには皆さんお誘い合わせの上、ぜひ1回見ていただきたいと思います。今年はまあまあな成績でしたけど、その上に行けるような環境をみんなで整えていきたいと思っています。

それから県立高校ですが、これは非常に難しい話でして、私立が学校の少子化に向けての学校間競争に勝ち抜くために特定のスポーツに力を入れるというのは全国でも同様な動きがあって、甲子園は先日、去年の大会が47都道府県代表のうち県立高校は7校か8校だけ。あとは全部私立。ですから全国でも同じような傾向が生まれています。ただ、そうはいつても愛媛県は県立高校が築いてきた歴史もありますから、ぜひ頑張ってきていただきたいと思ひますし、またそれなりの指導者の皆さんもいらっしゃいますので、野球ということに関してはこれからも名勝負を繰り広げてくれるのではないかとと思っています。ただ、県立高校の存続も考えた上で、スポーツや文化、何かに特化するのも1つの手ではないかと思ひます。例えば、去年の国体で北宇和高校なんかは馬術やったんですね。馬術で徹底的に磨いていく。あるいは伊予高が今、松前にできたホッケーを活用してホッケー部に徹底的に力を入れているということが言われています。四国中央市、川之江ではフェンシングに徹底的に力を入れていくと言われています。地域地域で何か特定の種目で磨いて全国に通用するようなものが生まれてくると、その学校のステイタスはどんどん上がりますので。そんな取組みというのは学校だけでは無理だと思ひます。

北条高校という学校がありました。北条高校、かつて松山市長のとときに合併したところだったんですが、最近、また新田が強くなってきていますが、一時ラグビーが急速に強くなった高校があります。強くなったのにはなったなりのわけがありまして、地域の人が北条地域の小学生たちを集めてタグラグビーをはやらせたんです。タックルなんかない。タグを取ったらタックルの代わりになるという。小学生からずっと子どもたちがタグ、タグ、タグでそういう大会を地域を挙げてやって、タグラグビーの選手がわんさか生まれたんです。このことを第1期生が北条高校に入って、彼らが3年のときに全国花園初出場を決めるんですよ。これはまさに地域が作り上げた北条高校ラグビー部なんですね。ですから、学校まかせではなくて、地域が一体となったクラブ活動というのでも1つ何か絞り込んでやるというのでも大きな力になるのではないかと思ひます。参考までにまた調べていただいたらと思ひます。

野球については、愛媛県全体が野球はスポーツを越えた1つの文化であるというふうにも思っています。今年から3年間“愛・野球博”といういろいろなイベントを展開する予定ですので、これは東中南予全てにおいて実施して行く予定ですのでよろしくお願ひいたします。

2. 県の協力によるサツキマスの生産面や販売面の土台づくりについて

愛南町で漁業・養殖を行っている。

私が住む愛南町では4年ほど前から山間部の養殖場で育てているアマゴを海水に馴致して、サツキマスという魚を試験養殖している。愛南漁協を中心として、我々生産者と愛媛大学南予水産研究センター、愛南町役場と三位一体になって取り組んできたが、生産面なり販売面なりがまだまだ力不足で、今後は県のほうにも協力を仰ぎながら一緒に土台づくりをしていきたいと考えている。

【知事】

これはサツキマスだけにとどまることではなくて、養殖業全体について同じ共通項でいえることですが、愛媛県ができることというのは2つのルートがありまして、1つは農林水産研究所。

これは愛大とも組んでやっていますけれども、何をやるかという今この市場に見合ったある程度の価格というものを見込めるような魚種の開発が1点であります。もう1点は既存の養殖業のコストダウンにつながるような研究。例えば餌であるとか、さまざまな研究を行う。もう1つ付け加えるとすれば、例えば、へい死の率を低下させる研究であるとか。こういったことが最終的にはコストにつながってきますので、こういった研究面でのサポートというのが1つの仕事であります。

もう1点は、これはほかの県ではあまりやっていないですが営業本部の活動でありまして、ただ、ものというのは一体どこの誰に売するのか、どこにニーズがあるのかというマーケティングをきっちりやらないとものというのはなかなか売れないものであります。だからそこを生産者の皆さんも考えながら、これはいけるぞとなったら、我々がその突破口を開く役割は幾らでも担ってまいりますので、これは営業本部を活用していただければいいと思います。ただ、我々営業本部はあくまでも営業の補助エンジンであります。突破口を開くルートを開拓する。これはという取引先を見つけてくる。でも、その土俵はつくれるけれども、最終的に交渉するのは当事者の皆さんなので、そこは営業力というのをそれぞれの皆さんが磨いていただく必要があると思います。これはものづくりもそうですし、営業力というのはプロモーションもそうですし、また人づきあいもそうですし、いろいろな方々と信頼関係を結ぶにはお酒を飲むのも必要ですし、そういったものも含めた人間性を磨くというのを我々も営業部隊、いつも考えていることなんですけど、そこで信頼が得られれば息の長い取引きにもつながっていくということにもなるかと思っておりますので、そういったことのノウハウというのもずっと蓄積してきていますから、ぜひ営業部隊と接触していただければいいのではないかなと思っています。

今、かんきつでもやったんですが、かんきつではどういうことをやったかという、トップブランドを1つつくってほしいと。要は数ある中の、多品種の愛媛県産全体のイメージの底上げを図る。トップブランドの存在によって、愛媛県産というのは本当に品質がいいんだねということによって、他県産との差別化を図って、そして市場価格を上げていくということを考えたんです。その役割を担ったのが紅まどんなど愛媛Queenスプラッシュでありました。これは紅まどんが東京の日本橋三越で1個2,200円で売れました。完売です。Queenスプラッシュが初値が1個3,200円で完売しました。この値段というものが、数が少ないですから本当にごく少数しか売れていないんですけど、これが宣伝されるんです。そうすると愛媛産というのは本当にいいものをつくっているんだなというのが市場評価につながってきます。

これは魚にもいえることで、そこで狙ったのが“伊予の媛貴海”スマです。あれは伊予の媛貴海をつくっている方だけのためにやっているのではなくて、愛媛県の養殖魚の品質はすごいんだなど。かんきつと同じ効果を狙っていますから、そこで愛育フィッシュという名前をつけて全国に売り出そうということを戦略的に考えてきた背景がありますので。

そのあたりで、サツキマスだと、恐らくサツキマス自体の提供するシーズンがどうなっているのか、ちょっと僕も詳しいことは分からないですが、そこが他の魚種とどういふかぶり方しているのかというの分析が必要があると思っておりますし、そしてまた売り先のエリアがどこが適しているかの分析も必要になってくると思うので、そういったこともしっかりと見極めて、やみくもに売るのでなくターゲットをしっかりと見定めて販売コースにかける。その中でそれに見合ったPR戦略を練るといったことが必要なのかなという感じがしています。幾らでも御協力はさせていただきます。

3. さくらひめの県民へのさらなる周知について

当社では、県でも推進しておられるさくらひめの栽培を2年前から開始している。今年で2年目の収穫を終えたところで、生産に関して技術指導にも来ていただき、いろいろ相談に乗っ

ていただいて大変感謝している。

販売面に関して、営業本部を中心として都市部での販売を行っていただいていると思うが、県内では、まだまださくらひめのことを御存じでない方がたくさんいらっしゃる。私たちも県内で販売イベントをすると、「それは何の花？」とか「かわいいね。」とは言っていたが、まだまだ知られていないのが現状ではないかと思う。もちろん、私たちも生産者として、先ほど知事もお話しされたように、つくるだけではなくて販売努力もしていく必要があるが、県のブランド認定されている花として、もっと県民の皆さんに知っていただければと思っている。そこで、知事にも積極的にさらに県民の皆さんに周知していただければありがたい。

【知事】

さくらひめは県の農林水産研究所の職員が11年間の月日をかけて開発したデルフィニウムの品種ですが、世界で初めてピンク色の着色に成功したというので、実はそれ4、5年前に知事室にこういうものができたと持ってきたときに、パッと見てサクラだと思ったんです。サクラにちなんだ名前がいいねということで、さくらひめという名前につながっているんですが、暑い愛媛であれば7月ぐらいまでとれますから、サクラは一瞬で終わってしまうんですけども、7月までサクラの気持ちが味わえるような花として売り出せるのではないかというのが1点。4年前の全国のフラワーショーで軒並み優秀賞を獲得しましたので、それを生かせるのが2点ということでスタートしました。

7月で終わるのはちょっとさみしいということもあったのですが、原課が考えてくれまして、気候上、愛媛県では7月以降は難しいということで、北海道のほうに提携先を見つけまして、8月、9月は北海道でつくってつないでいくという体制を整えたところでございます。

まず対外的な売り込みについては、やはり希少品種でありますから高級店での認知度というのが突破口になるだろうということで、東京の日比谷花壇を攻めるということで、日比谷花壇のウエディング用のものに採用していただけることになったので。ここは日比谷花壇が取引きしている、使っているということにもなりますと県外への売り込みがものすごくやりやすくなります。信用がそこで発生しますから。これはこれから徐々に拡大していくんだろうと思っています。

一方県内では、空港で航空会社とタイアップしたキャンペーンでポスターを貼ったり、いろいろなことをやっているのですが、まず数に限りがありますから、全県で知られているかというところはまだだだなと思っています。

そこで先般、他の工芸品とのコラボレーションという戦略が編み出されました。これも原課が考えてくれたのですが、例えば大洲の和紙とさくらひめのコラボレーション。四国中央市の紙、ティッシュとのコラボレーションとか。いわばさくらひめというネーミングを使った伝統工芸品の新たな展開をやることによってさくらひめの知名度を上げていくと。これは特にさくらひめの和紙でつくったカード入れ、これは絶対にいいですよ。例えば、どこに売り込みに行ったらいいかということ、銀行とか。銀行の新入行員の女性がみんなあれを持ったらすごくイメージいいですよと売りに行ったらいいですよ。片方行ったらもう1個のライバル銀行は検討してくれていますよって言ったらいいんですよ。なるべく営業していくということが大事なかなと思います。それによってさくらひめの知名度も上がっていくということなので、我々も頑張りますけれども、ぜひ生産者もいろいろなところに積極的に出てきていただいて、大いにPRしてください。

4. 鬼北町に屋根付きのスポーツ施設を建設することについて

昨今の健康ブームで、この鬼北町でもウォーキングやランニング、あと自転車、ブルーラインの整備のおかげで皆さまが頑張られている姿をよく目にする。ほとんどの方が早朝や夕方に運動されているが、雨のときや暗いとき、特に今は物騒な世の中なので、女性の方はもちろん、

安心・安全・快適に運動したいと考えているのではないかと思います。

しかしながら、この鬼北町、残念ながら街灯の数が少なかったり、国道で走ろうと思っても歩道の段差があり、対向車の反射とかでかなり危険な状態である。そこで1周 500メートル以上、照明、屋根つき、アプリつきの人が集まるような施設をつくっていただきたい。施設があれば遠くからでも車で通って来て、そこで運動してもらえるのではないかと思います。

農地法、地権者の了解などをいろいろクリアしなければならない問題があるが、鬼北町の最も便利な場所、総合公園の入口に広いい土地がある。もしこの事業が可能ならば、この広い土地は将来起こるとされる南海トラフ大地震の有事の際、仮設住宅の建設候補地としても利用できるを考える。通常、仮設住宅の建設の着工まで1カ月はかかるとされる準備期間短縮になり、避難所生活の短縮になる。また、学校に通常用意される仮設住宅と違い、授業再開の際も支障がない。

また、有事がなければ、今、中学校、高校は野球部とサッカー部がグラウンドで練習しているが、野球部のボールをよけながらサッカー部が練習するというような現状なので、その利用にもつながるのではないかと。あと、便利な場所であるため、一般に開放できるのであれば宅地化も進め、住みやすい地域にしていけば、鬼北町の人口減少対策にもつながるのではないかと思います。

(司会)

確認ですが、1周 500メートル以上の屋根つきのトラックと言われていましたか。

(参加者)

これは自分の妄想もあるんです。

(司会)

はい、分かりました。総合公園の入口というのは。

(参加者)

できたらいいなと。

(司会)

できたら女性の安心・安全な運動にもつながるのではないかというお話をされていました。知事、よろしく願いいたします。

【知事】

ちょっとすぐにどうだということはなかなか言えないですけども。身近なところで運動ができるというのは非常にいいことで、僕らも家から歩いて3、4分のところに公園があって、だいたい1周 900メートルなんです。そんなに煌々と明るく照らされているわけではないんだけど、足元はちゃんと見えるぐらいですから、そこで結構みんな朝走っている人、夜走っている人、散歩している人、みんなによく会うんですけど、かなり活用が活発になされている公園になっています。1周 900メートルなので、ちょうど距離感が分かりますから、結構利用されている方が多いですね。

そのほかにも堀江という地区ですが、ここは大きなため池があって、あそこは1周どのくらいあるのかな。やっぱり1キロくらいあるのかな。ため池の老朽化改修工事のときに、ジョギングコースをつくってしまったんですね。これは地域でものすごい多くの方が利用されている状況になっています。それから自転車という重信川沿いに自転車道があって、夜はちょっと暗いんですけど、ライトがあればできるかなというくらいです。その距離という坊ちゃんスタジアムの総合公園から砥部町なので、何キロくらいかな。15、16キロくらい。12、13キロか。往復で24キロくらいということで、結構夜でも。たまに走ったりするんですけど、そんなに多くはないんですけど、楽しんでいる方がいらっしやいます。もちろんそこはジョギングをやっている方もおら

れます。そういうところがあればいいのは分かっていますが、なかなか地域でそういう場所が見つからないと。

内子だったかな。内子はそういうニーズに応えるために、どこだったかな。トレーニング施設か何かつくったでしょ。ズラーッと。この町にこんなものがあるのっていう。何て言うか、ジョギングマシーンって。トレンドミルって言うんですかね。あれが置いてあって、結構お年寄りの皆さんがあれでジャカジャカ並んでいつも走って健康増進に役立っていると。これも1つのやり方なのか。初期投資はもちろんかかるのですが、民間がやっているのか官がやっているのか、ちょっと僕も分からないですけど、ものすごい人がいました。しかも結構年配の方がガンガン走っている光景に驚いた記憶があるんですが。屋内ということに関して、これも1つの方法なのかという感じがいたします。

さっきの場所につきましては、ちょっとこれはどういう権利関係になっているか分からないので何とも言えないですが、特にほ場整備したということであれば、ほ場整備の事業そのものは地権者の要望のもとに県が行った経緯があると思うのですが、あくまでも県がやるのはほ場整備だったので、できた後の活用については個人の所有物なので、個人の了解が得られるかどうか。それで農業以外の活用ということになると町がどう考えるのかということがテーマになってくると思うので、今日町の職員さんもらっしやるかな。町長います。町長が今、ガッツリ聞いていますから検討されるのではないですかね。伝わったのではないかと思います。

《補足説明》〔南予地方局〕

鬼北町に確認したところ、

「現在、鬼北町では、木質バイオマス発電誘致計画を進めている。この中で、この発電により発生する熱源の二次利用として、B&G海洋センターの温水化等が検討されている。

今後、誘致計画と併せて、温水化の計画も進めていくことになるが、熱源の二次利用でプール温水化が可能なのか、可能であれば現施設を改修して使用するのか、あるいは別の場所にプールを新設するのかを具体的に検討していく。

県外のB&Gプールでは、老朽化や利用者の減少などにより、プールから多目的屋内運動施設へと用途変更して活用している事例もある。

現在のところ、木質バイオマス誘致計画、温水化計画の方向性が定まってないため、これらの進捗を見ながら屋内運動場の設置についても検討していきたい。」

とのことでした。

5. 行政と地元が連携したごみ回収の取組みについて

私は、愛南町の過疎地、県道の行き詰まりのところに住んでいる。ずっと東京にいたが単身Uターンして、何か事業はできないかと1年半くらい動いている。

ここは、非常に北西の季節風が強いところで、海に漂流するごみが海岸に漂着してくるが、地元の人には風が方向が変わって別のところに流れていくのを待とうと諦めている。私は、ごみを取り、海辺に流れてくる漂流物を撤去して、恵まれた自然は残しながらできるだけきれいなふるさをつくっていきたい。地元の人だけではなくて県内、特に松山方面から釣りに来る方が多く、また、県外は高知や岡山、広島、福岡からも来る。非常に不便なところなのでマニアックな方しか来ないが、昨年8月は延べ100人ぐらいが訪れた。非常に景色がよくて魚がよく釣れるということが特徴である。

海辺へ漂着するごみが非常に問題で、町の土木事務所や役場のほうへいろいろ相談に行っているが、地元のほうである程度回収すれば、町が責任を持って処分をするための回収に行くという流れができたので、私もその方向でできるだけ努力して、今現在、かなりきれいな状態に

なっている。ただ、また季節風が秋口から吹いたり、台風が来たりすると同じ状態に戻る。絶えずやっていかないとごみは回遊するものなので、今後続けたいと思う。

そこで、行政機関と地元民が連携する取組体制をつくってほしい。県、町、地元民がそれぞれの役割を分担してそれぞれ責任を持ってその役割を果たしていくような仕組みができれば、コストも最小限に抑えてやっていけるのではないかな。

【知事】

海のごみの漂着の問題というのは、これは全国どこでも同じような課題があって、県内でも例えば八幡浜でも大きな問題になっていますし、宇和海でしたら三崎のほうでも同じようなことで悩んでいる状況になっています。そういう中で、基本的には地元の皆さんが頑張ってください、それに協力するという形を取らざるを得ないんですが、これもまた知恵を絞ればいろいろなことができるかなという感じはするんです。それがいいとは思いますが、今のお話聞いていても、例えば景色がよくていろいろな魚が釣れるということであるならば、その季節が来たら釣り大会を呼び掛けて、その代わり参加するためにはごみをまず拾ってからだと。ごみを拾ってきれいにすることを条件に地元の河内晩柑でも、地元にあるものをプレゼントしますという。順位をつけてプレゼントするとか。そんな釣り大会を開催してごみの収集に協力をいただくような仕掛けをイベントとして行うというのも1つのアイデアかもしれないし。

それから、これは三崎がやったのですが、三崎高校の子どもたちが高校をあげて愛媛県が主催した子ども芸術祭に作品を送ってくれたんです。夏休み挙げて。何をつくったかという、三崎に漂着するごみを使ったモニュメントの作製。そのモニュメント、今でも砥部のこどもの城に飾っていますけども、ものすごい力作で、こんなものが漂着するのっていうのがその作品の中にいっぱいあるんです。でも、高校生のアイデアでそれらを使った芸術作品ができていますね。だから芸術作品としても見れるし、人間ってこんな物まで捨てるんかという環境問題も考えるし。これは面白い試みを当時の先生はやったなと感心したことがあるんですけども。さっきのお話じゃないですが、ピンチをチャンスに変えるという方法というのは幾らでもあるのかなという気もするので。要は楽しそうなところに人は集まりますから、そういう空間として何か工夫ができないかというのを考えてみられてはどうかと感じました。特に釣り大会なんてそこまで行って。何が釣れるんですかね。そこ。

(参加者)

カサゴ。地元ではホゴといいます、タイなど、いろいろな魚が釣れるんですが、大きいのは50センチ以上。

【知事】

珍しい魚って何かある。

(参加者)

私は素人なんでカサゴ釣りしかしたことがないので。

【知事】

それを釣ったらとてつもないプレゼントが待っているとかな。幻の魚をゲットしろとか。

(参加者)

私も、養殖場の近くでタイが釣れるんですね。それが自分の家では食べきれないので来た人に冷凍したままプレゼントするんですよ。そしたら非常に喜んで帰るので、それで私も満足感があるというのが1つ。それから先ほどのごみの中でも流木というのが、処分するよりも取っておいて、何か木工細工を試してみたり、何か飾りにしたりということではできないかと思って、今随分集めています。これは今からどう展開するか楽しみの1つであります。

6. 地元での起業支援及び小規模起業家のネットワークづくりについて

地元愛南町での起業支援について。元真珠養殖の作業小屋であったところをリフォームし、昨年、海の家をつくった。観光協会のブログにも協力していただいて1月から8月にかけて無料開放したところ、8月だけで100人来た。車の離合が難しいところもたくさんある非常に不便なところであるが、それでも人はやってくる。今、ネットの時代なので、景色がよくて魚が釣れておいしいものが食べられれば、どんな苦労してでも行くという人が結構いることがこれで証明できたような気がする。なので、今つくっている海の家設備の充実、例えば公衆トイレとか、民泊できる施設とか、そういったことを展開していこうと思っているが、町のほうに働きかけても、なかなか前例がないので「実績をつくったら相談しましょう。」と言われる。実は起業家にとっては実績づくりまでが大変で、それまでに何らかの協力、支援体制があって、初めて軌道に乗せられるめどがつくので、ぜひそういった小規模な起業家に対しても、支援、協力をお願いしたい。

そういう小規模の観光地が愛南町にはたくさんできる可能性があるので、ネットワークをつくって、愛南町にはこういった小規模の観光地がありますよと観光地全体で県外の人にもアピールして、1つの売りとしてやっていけるような御協力をいただければと思っている。

【知事】

それから宿泊については愛南町がどういう戦略というか、町として、愛南町はすごくいいところなんです泊る場所は非常に少ないんですね。あるのはサンパークとか。サンパークももう老朽化でなくなっていく方向にありますから、余計宿泊。特に高速道路が延びていったときに宿泊施設がないという大きな問題が浮上してくると思うので、そのときに備えて簡易宿泊所であるとか、今回民泊の法律が変わりましたから、こういったことを町としてどういうふうに描いていくのかという、まず基本的な考え方が必要だと思うんです。その基本的な考え方が固まると、例えば空き家を活用しようとか民泊を進めていこうとかいうふうに方向性が出てきて、方向性がしっかり町とつながったらそれに対するバックアップ制度ができる。それに対して県も少し付き合っていくという話になってくると思うので。愛南町で将来高速道路が延びたときに人を引っ張るための泊まるための施設がどうあるべきかというのは町として議論されたら面白い答えが出てくるのではないかというふうに思います。

特に愛南町に行ったとき、僕は漁家民宿に2、3泊まりに行ったんですけど、本当にいいですよ。皆さん、ものすごく奥ゆかしくて、もっと値段上げて大丈夫ですよって言いましたよ。安すぎるんですよ。民泊行って朝飯ついて、4,000、5,000円でしたよね。しかも朝はわざわざ深浦漁港までとりに行って、刺身まで出してくれて、お母さん、これもっと高くても来るよと言うけど、「いやいや、十分ですよ。」という感じなんで、もったいないなと思いました。特に宿泊所で女性を取り込むためにはトイレとお風呂がきれいじゃないとちょっと厳しいと思うので、そこは力を入れたほうが良いと思います。

(参加者)

私はすでに空き家を今年民泊用に改造中なんです。そこで町に具体的にになりましたら御相談に行こうと思っているのですが、また県のほうに御相談に行くかもわかりませんが、ぜひ御協力をお願いしたいと思います。

【知事】

ぜひ町とのこういった会があると思いますから、一軒一軒だとなかなか制度って立ち上げにくいんですけど、町としてさっき言ったように、大義名分じゃないけど高速道路がやがて延びていく、そのときに観光客、訪れた人が泊まる施設はどうするんでしょうか。今からホテルはなかなか無理がありますね。そうすると空き家活用とか民泊じゃないでしょうかという中でどういうふうに、

何軒くらいネットワークをつくろうかという戦略が生まれてきて、そしたらそれを到達するために助成制度をつくるかというふうになっていくと思うので、そこを議論されたらいいのではないかと思います。

7. 広見川の川上り大会を盛り上げる方法について

川上り大会とは、全長で 4.7 キロ、1 区間が 1 キロもないが、男子が 8 人で 8 区間、女子が 5 区間川を上って走るもので、中村知事にも何年か前に参加していただいた。スタートする前はみんなニコニコしているが、スタートしてから自分の区間を走り終えるころには地獄絵図のような、地を這って這い上がるような、愛媛マラソンと匹敵するくらいのしんどさである。先ほどの知事の話からすると、よそもやっていないことの 1 つで、鬼北町ではこういう素晴らしい大会があり、毎年、県外からも何チームか参加者がある。

しかし、やはり内々でやっている、外側から見たときのよさが分からない部分があったり、ずっと地元にいると、よそから言われないうちになかなか気づかなかつたりする。知事ももう 1 回は走ってくださるかなと思ったらなかなか来られないので、こういうところをもうちょっと盛り上げたらうまくやれるんじゃないかとか、そういうアドバイスをいただき、今後役に立ていけるようなことがあれば教えてほしい。

【知事】

4 年ぐらい前に参加させていただいたのですが、はっきり言って、出る前、思いっ切りなめていたんです。僕もフルマラソンもハーフもヒルクライムもやりますから、たかが 1 キロもない 600 メートルか 700 メートル楽勝だよ、そんなものって当日までなめていました。嫌な予感がしたのは、最終アンカーの区間だったのですが、前の走者がトライアスロンをやっている人だったんですね。ボロボロになっているんです。トライアスロンやっている人間がここまでなるのって。その姿見て真っ青になってバトンを受けた記憶があります。たまたまアンカーで僕のすぐ 5 メートル後ろでもう 1 つの組が入って来たんです。同じアンカーでバトンを受ける人が同い年くらいで、お互い意地になって絶対負けないからな、とか言って。こっちが先に行ったので、追っかけて来られる側だったので逃げることに必死で、とにかく全力でやったんです。

それで何が難しいかと言うと、ちょっと濁り気味の日だったので、つけた足が次の一歩でどのぐらいの深さのところか足が着くのか分からない。しかも着いたところがツルツルの石があるかもわからない、ないかもわからない。一步一步にすさまじい緊張感が漂う川上りレースでした。一歩コースを間違えると行き止まり状況になってしまうので、引き返さなきゃいけなくなって、そこで行ったり来たりしたというのもあった記憶があるんですが、ゴールしたときにはしばらく川から上がれなかったですね。たかだか 1 キロ弱ですけども、その疲労感はフルマラソンに匹敵するようなものであることは本当に間違いないです。

世の中には変わった人がたくさんいます。苦しければ苦しいほど出たいという人がいるんです。でも、多分、距離の長さ見て、そんな大変なものじゃないだろうと僕が最初に抱いていたぐらいの思いで見つめている人が多いと思うんですね。だから、もっと経験者の塗炭の苦しみを味わったとか、トライアスロンの選手ですらこうなってしまったとか、厳しさをもうちょっと PR してもいいのではないかなと。

例えば、石鎚のヒルクライムという自転車レースがあるじゃないですか。あれもえぐいですよ。最初はとにかく、久万高原に自転車のサイクリングパラダイス化に向けて久万高原のこれでやろうよという話を持ちかけて、これで人なんか来るのかなというのが最初です。

最初は 280 人ぐらいでやったんです。様子見で。300 人の定員で出走者数が 280 人だったんです。第 2 回大会は嵐が来たとかって。でも、嵐の中、強行でやろうということでやって、ギリギ

リ大丈夫という判断だったんですけど、とにかく景色も何も覚えていません。とにかく下向いて根性、根性、根性って言いきかせてただ走っていただけという記憶しかないのですが。ところがあそこの売りは、本当に大変なんだなと。西日本の最高峰に挑戦というメリットがあったんですね。それで第1回やって、SNSでまたとてつもないコースだった、厳しい、厳しいというのが広がっていったら、翌年からどんどん人が来始めて、今、800人ぐらいまで増えているのですが、足切っています。もう対応しきれないというので。増やそうと思ったら1,500人ぐらいになるんでしょうけれども800人が今のところ精いっぱいだねというので、800人で足切り状態なんですけど、県外からも多くの方々が来るんですよ。

そのときに世の中って本当におかしな人がいっぱいいると思ったのは、過酷であればあるほど挑戦者が出てくるということを知りました。来る人も本当に変わっています。自転車1台で100万円ぐらいの自転車に乗っているおじいちゃんとかおじさんとかいるんです。でも、積んでくる車はボロボロの軽自動車なんです。要は自転車以外にお金は全く使わない人なんです。これでもね、「西日本の最高峰やけん走らないかんのや。」って言って毎年来るんです。

だから、広見川の川上りというのは、本当に過酷なんです、トライアスロン選手でさえ悲鳴を上げる、さああなたもチャレンジという打ち出しもいいのではないかなというふうに思います。実際そうですから。

もう1つは、ゴールした瞬間に特にハーフマラソンとかマラソンでよくあるんですけど、例えば、松野町の桃源郷マラソンは、あれゴールしたとき何だっけ。松野はなんだっけな。松野は途中で梅が出てくるのか。野村の朝霧湖マラソンはゴールした瞬間に朝採れたての牛乳が出てきます。東予のほうに行きますと、上島町の生名島マラソン。これはゴールした瞬間に貝の出汁を取った味噌汁が出てくるんです。

ゴールした瞬間にそこの特産品の何か、もう何でもいいです。特産品の味わえるものが提供できると、ゴールした瞬間にあれ食べたいねというイメージが出来上がってくるので、そこらへんちょっと工夫されたらいいのではないかなと思いました。そんなにお金がかかるものではない、手づくりでいいですと。地元の食材を使って何か提供することがあったら、余計キャラクターが濃くなるのではないかなということはそのときに感じました。あとでみんなで倉庫の中で食べたというのはありますけど、ゴールした瞬間なんです。そこに何かがあるといいと思います。

【知事】

さっき、イベントの特色で1つ思い出したことがあるんだけど、フランスという国でマラソン大会があるんですね。変わったマラソン大会で、その地域というのはワインの産地なんですね。給水所に出てくるのは全部ワインです。みんな半分ぐらいのところでグデグデに酔っぱらって、世界で最も完走率の低い大会として有名で、だからこそ人が集まってくる。でも、1回これを日本酒でやったらどうかと言ったら、日本では絶対認められないだろうと言われて、これは無理なので、例えば川上りでゴールしたらどぶろくが一気に飲めたりとか。ちょっとこれは過酷かもしれませんが、ちょっと変わったものをやるというのも面白いかもしれないですね。鬼北だとユズがあるので、ゆずジュースとか。冷えたゆずジュースがクイツと飲めて体力回復するとか、そんなのもいいかもしれないですね。

8. IR推進法案成立後の宇和島市への誘致について

IR推進法案が成立後、ぜひとも宇和島市に誘致してもらえればなと思っているがどうか。活性化の起爆剤になるのではないかと思うし、外国の方も大勢いらっしゃるの。

【知事】

そうですね。IR法案というのはすごい取り扱いが難しいと思うんですね。やり方によって成

功しているところはアメリカなどはあるんですけど、場所によっては、えって言うくらい逆の結果が出ているところも実際あります。特に韓国は広げたことで失敗したいい例だと思うんですけど。あとマカオもちょっと厳しくなっていて。恐らくそれが誘致されるということになったら、大都会の場合はいけいけどんどんになるかもしれないですが、地方の場合はかなり賛否両論、拮抗すると思いますね。実際にパチンコ依存症じゃないですけど、依存する方が出てくることに対してどう手を打つのかなという問題と、もっと言えば日本の企業にそういったものを運営するノウハウがあるわけではないので、一体これ誰がやるのかな。となると、巷間言われているのはトランプ大統領の側近がやるんじゃないかというふうに週刊誌等では盛んに言われています。ということは、上がりの大半は取られていくということもあり得るのです。海外はそうなんですよ。アジアの国でやっているものは全部そういう方式になっていますから。そのへんの分析というものもしっかりしないといけないのかなというふうに思います。あつたら瞬間的にはいいと思います。本当に長い目で見てどうかというのはやっぱりよく分析したほうがいいと思います。

もう1つは、世界のIRで流行っているところは空港に近いということが理想なんですよね。離れたところというと、徹底的に離れている。例えば島の中に隔離したゾーンがあって、そういう場所に集結しているとかいうならば、客船が着いてそのまま行くということが可能になると思うのですが。恐らくそうやって絞り込んでいくと、日本でやるとしたら結局限られてしまうかなという感じがしています。個人的には。愛媛ではそういったことも含めて今のところ手を上げていないというのがそういう理由です。

9. 市町村合併について

15年前にUターンで地元に戻ってきた。合併する前は旧日吉村で、帰ってきて1年半後ぐらいに鬼北町になった。帰ってきたときは合併するのにもものすごい反対で、地元がなくなるようなイメージがあった。町長も聞いているのでどう思うか分からないが、帰ってきたとき合併はすでに決まっていたことである。

なぜ合併しなくてはならないのかと地域の役場の同級生に聞くと、経済的にもいろいろな理由があり、合併せないとということになって合併した。そのとき行政のほうは、対等合併。合併すれば今のサービスを維持できるということで、村のころは結構恩恵を受けていたらしく、それが維持できるのであればということになって合併したという経緯があるようだ。実際、いいことばかりではなく、やはり対等合併といってもどうしても中心のほうに人は流れていくし、端なのでなかなか大変である。

【知事】

合併のことについて振り返ってみたいと思いますが、当時は僕も松山の市長の仕事をしていただいていた。自分自身は合併はこちらからするという事はしない方針だったんです。ただ、周辺からぜひ合併をとすることは相談に乗りますということだったので、その中で北条市と中島町が将来を考えて合併を検討してもらいたいということで、こちらの場合は編入合併だったのですが、やりました。

なぜそうなったかというのは背景があって、国は当時どんどん、どんどん、国債残高が拡大して借金まみれになって、もう地方のことまで手が回らない。地方が生き残るためにどうすればいいかということ突き付けられたんですね。実際に交付税とか補助金が減らされて、夕張市は破産まで追い込まれて、そういう状況に立たされたときに国が示したのは、合併したら餡が待っています、しなかったら鞭が待っています。その餡はたいして甘くないノンシュガーの餡だったんですけどね。鞭のほうは中に鋼が入っていてビシビシでこれを突き付けられて各市町がどうすればいいんだという決断を迫られたんです。当時、3,300の市町村があったんですが、今1,700台

になっています。生き残るためにやむを得ざる選択としてやったというのが実態で、ほとんどの人は、例えば中島町だって合併なんかしたくなかったんですよ。名前が消えちゃうとか、さみしいですよね。サービスどうなるか分からないということで無理強いはできないなと思っていたのですが、生き残るためにやらざるを得なかったわけですね。やりました。

そこから先は、新しい自治体の長の考え次第だと思います。

松山市の場合は編入だったので余計気を使わなきゃいけなかったなと思ったので、何に困っているかを洗い出しして、それを順次やっていく。例えば島だったら水の問題なんとかしろ、病院を建て替えよう、学校は1校に集約するけど新校舎をつくろう、港の駅をきれいにしよう、救急体制を整備するために救急車搭載型の消火器付きのフェリーをつくろうとか、いろいろな事業をやって皆さんに納得していただいてきた歴史があります。北条も同じようにやってきたつもりなんですが、それでも支所の配置の人数がだいぶ減りますから、さみしい思いはあるということは声として挙がっていました。だから、トライアスロン大会を中島でやったんですけども、当時、町民の皆さんは合併するんだからもうやめようと言ったんだけど、駄目だと。こういうときこそやりましょう。合併したことによってPR効果は絶大になりますから、むしろ人は増えるんだと。前向きにやりましょうと言って存続が決定した背景もあったし、それから“島博”をやろうということで、島に人を送るという仕掛けをしたり、いろいろなことをやった記憶があります。

ともかくやむを得ざる選択だったということは、間違いないということはぜひ分かってあげていただきたいと思います。

10. 地元を盛り上げるマラソン大会について

地元を盛り上げたいということで、あちこちで流行っているマラソン大会が日吉でもできるんじゃないかと、去年12月に思いついて、100名、参加料1,000円で開催した。Facebookで募集をかけたところ、県内から74名応募があり、当日は1割ぐらい落ちて60名ちょっとの参加で、日吉の父野川線のハーフマラソン1本だけで開催した。

今年、2年目、第2回を開催した。町の補助金も多少いただき、300名の募集をかけて、また同じようにチラシだけつくってSNSで呼び掛けしたところ、180名の応募があった。タイムを取ってくれる業者に記録もつくってもらい、完走賞なども出した。当日、160名ぐらいは参加してもらえた。来た人は一本道をただ山のほう、広見川の上流なので、言うなら四万十の愛媛県側の源流を走る。今年は第2回目、もうちょっと人を増やしたいのでハーフと10キロのコースと2つつくって大会を行った。来年も、今度は町の補助金はいただかず全部自前でやろうと考えている。

これは知事へのお願いであるが、大会を盛り上げたいので、できればここに参加していただきたい。ゲストを呼ぶにはお金がいろいろかかるので、知事にちょっと遊びに来ていただいたらと思っています。

【知事】

マラソン大会なんですけど、これは自分もいろいろ経験があります。

一番最初にやったのは今の愛媛マラソンなんですけど、実行委員長でした。今のコースに切り替えるときにはみんな反対だったんですよ。ちょっと規模が違いますけれども、誰が反対したかというところまず鉄道会社、どことは言いません。1社しかないですけど。バス会社、トラック協会、ガソリンスタンド業界、ゴルフ場業界、商店街、みんな反対です。あと、とどめが警察。みんな反対です。それを1個1個つぶしてやらせてくれ、やらせてくれと2年がかりで関係者と一緒に口説いて行って、最後ゴーサインが出ました。第1回目、あの愛媛マラソン、実は定員割れなんです。どれぐらい集まるか分からないからとりあえず5,000人でやってみようと思ったら3,800

しか集まらなくて。さあ、「実行委員長、中村くん、どう責任取るんだ。」って、出ますと言って出ざるを得なくなった背景があるんです。それが非常に好評で、翌年からはどんどん、どんどん人が来るようになって、今は1万人規模になっていますけれども。20分もすれば埋まってしまうような全国屈指の人気大会になりました。今は、また抽選に落ちたといっぱい文句を言われます。立場上、すみません、こればかりは公平にやっているのでもうどうしようもないんですよって言ってますけど、内心では、あんたね、第1回目の定員割れのときに出たらへんやろがって。本当はそういう思いがあるけれども。

でも本当になぜそういうふうになんか人気になったかといったら、間違いなくおもてなしです。走っていても沿道から頑張れ、頑張れの住民の皆さんの声。皆さんも楽しみにしているんですね。今年はどういう応援をしてあげようとか。行く先々でその地域に根差してきた獅子舞が出てきたり、次のところに行ったら太鼓台が出てきたり、神輿が出てきたり、歌を歌われたり。走っていてもどんどん空気が変わっていくんですよね。そういうおもてなしが充実しているので、どんどん人気が出てきたという背景があります。

実は、ハーフマラソンで成功した例は南予の身近なところであって、1つはさっき言った松野町の桃源郷マラソン、野村町の朝霧湖マラソン。これも見事なものです。松野町は人口が今4,000人ぐらいですね。マラソン参加者3,000人ですから、異様な人数です。朝霧湖マラソンも二千数百人になっていると思います。両方とも走って見たんですが、同じようにおもてなしが非常に充実しているので、リピーターが、評判が拡散して新たな人がという繰り返しになっていると思うんです。

そんなときにさっき東予のほうの例を取り上げましたけど、生名島という上島町というところは愛媛県ですが、マラソン大会をやっていたんです。上島に行ったときに、どんなマラソン大会をやっているんですかって言ったら、250人ぐらいで10キロのマラソン大会を10回未だにやっているんですよっていう話でした。コースは生名橋という橋がかかりましたから、橋を使って島を渡って行くんです。海の上を走れるから、それはもう少し考えたら面白いコースになるよって。1つ、間違いなくやらなきゃいけないのはハーフマラソンをやったほうがいいと。10キロでは人が呼べないんですね。やっぱりハーフ正解だと思います。ハーフマラソンがあって、10キロもあって、初めて参加者が増えていく条件ができると思うんですね。第1回、生名でやることが決まって、すぐに実行委員と話したのは、1回松野町と朝霧行って来いと。ローカルであれだけの人が集まるマラソン大会に成長した秘密がそこにはあるから、実際見てきたほうがいい、運営から話を聞いてきたほうがいい、それを参考にしたほうがいい、ということでやりました。

彼らは上島から南予見てきて、それを参考にして最初のハーフマラソン大会をやりました。そのときが、それでも350人ぐらいだったんです。300人ぐらいだったかな。今どうなっているかというとなら1,200人になっているんですよ。どんどん、どんどん進化して、沿道の島民の皆さんも慣れてきましたから、沿道そこそこで声援が送られて、給水場もここにあったほうがよかったねって声があったので増やして行って、絶妙なところに給水場があるんですね。さっきの貝じゃなくてワカメのみそ汁でした。ゴールしたらワカメのみそ汁が待っているんです。そういう特色をやって、今では大人気の大会に育って来ました。すぐに結果が出るかというのは別ですが、成功例があるので、ぜひ次なる魅力ある大会として育てていただきたいと思います。地方であればあるほど、人も行ってみようかなという気持ちになると思いますし、アップダウンはどうなんですか。

(参加者)

高低差は90メートルぐらい。ダラダラダラダラ上って、ダラダラダラダラ帰る。

【知事】

じゃあ、大丈夫ですね。大丈夫です。アップダウン。

(参加者)

それはないです。

【知事】

ただ、あっても変な人たちが出てくる。でもまあ、それだったら誰でも走れそうな感じなんで。生名はフラットです。松野はこれぐらい。桃源郷はドカン、ドカン。それぞれに特色があっているのではないかなと思いますし。もし認知されたら南予3大ハーフマラソンとかって、リンクさせて3つ全部完走したら何かプレゼントとか。そんなことをやっても面白いかなと思います。

11. 愛媛への移住者に対するサポートの充実について

私は神戸の出身で、去年の4月に松野町に移住して今協力隊をしている。松野町は人口が4,000人ぐらいで協力隊が8名、私は観光であるが、農業や教育などもあり、それぞれが活動を行っている。

私はちょうど1年2カ月ぐらい経ったところで、住んでみて気付いたことが、松野町は人が温かくて、町民同士のコミュニティが本当にしっかりしているなと思う。最初はここまで入り込むのかと戸惑うこともあったが、でも、これがあるからこそ何かあったときに頼れたり助けてくれたりする関係があるんだなと思っている。

移住してから、もちろん協力隊でもあるが、同じように松野町に移住してきた方とか、大学で県外に出たけどやっぱり松野町で就職したいとUターンで戻って来た方とか、東京とか大阪に今は出ているけど、そこで愛媛の魅力を発信されている方とか、いろいろな方と交流する機会が増えた。定住人口であろうが、関係人口であろうが、どんな理由であれ、みんなが愛媛についてすごく熱く語っているのがかっこいいと思う部分がある。

今、全国的に、愛媛も、移住者が増えているのもあって、移住する人に起業傾向があるというのを感じる。先ほど知事の話の中にもUターンであったり移住者へのアプローチとかサポートというお話があり、今も移住に関しては結構サポートも充実してきているとは思いますが、今後何か考えられていることがあれば教えていただきたい。

【知事】

松野町って小さいながらもいろいろ魅力がてんこ盛りで、例えば、松丸駅というのは四万十川サイクルの拠点として非常に有利な地の利を持っているなと思っています。四万十のサイクリングというのはフラットなので初心者が走りやすいとても美しいコースで、松野から鬼北へ行って四万十へ行って道の駅でUターンしてくるとというのが本当に絶好のコースなんですね。帰ってきたら駅前で“ぽっぽ温泉”に入って帰っていくと。こんな恵まれた拠点は無いなと個人的には思っています。と同時に、地域の皆さんもいろいろな取組みをされていて、例えば面白いなと思ったのは武者伝走なんていうのは、あれはよく考えたなと思うんですが、みんな武者の格好して先頭走っている人が突如行方不明になるんです。行方不明になって、最後ビリで落ち武者になって帰ってくるという、こういうユニークな人たちがいて楽しいなと思った記憶がよみがえってきます。

南予も地理的な条件はあるんだけど、やり方によっては企業の誘致も十分可能だなと思って取り組みました。おとしは3社工場が来ているんですね。やみくもに行っても来てくれないので、何にターゲットを絞ったかという、南予の食材というものを活用する会社をセレクトして、そこに集中攻撃をするんです。松野にはかんきつとか真珠とか、そういった成分を使った化粧品をつくりたいという“プロテックス・ジャパン”という会社が2年前に工場をつくってくれました。今、これが愛媛県の素材を生かした商品開発をどんどんやってくれています。西予には“ちぬや”という冷凍コロケのナンバー1の会社が工場をさらに投資すると言ってくれているので、食材を活用して冷凍食品をつくるということで来てくれています。

それから何と言っても今年立ち上がったのが宇和島市の“源吉兆庵”という日本最大の和菓子メーカーの工場で、ここは本当に南予エリアのかんきつ等々を中心とした食材をその場で加工して世界に製品として出していくということで思いがフィットしたということで来てくれました。ただ、条件としては場所の確保と源吉兆庵さんが求めている品質の食材を提供してくれるかどうかだと。その品質を保証してくれたらしっかりとした値段で買い取るという条件なんです。宇和島だけじゃ無理なので、鬼北町と松野町一帯で考えるというふうな仕組みをつくって誘致した経緯があります。松野ではモモ等々が中心で栽培してくれていますし、鬼北ではクリ等々の栽培もしてくれていると思いますが、しっかりとした値段で取ってくれますから、ちゃんと生産すれば収入が見込めるわけですね。だから若い農業従事者がそこに参入できるという道筋ができるという期待感もありました。そんなことで、十分に地域の特性を生かせば業というものも生み出せるなと感じています。

移住者につきましては東京等々、都会で暮らす人たちは疲れ切っていますから、通勤ラッシュ、コンクリートジャングル、乾いた人間関係。人間性というものが失われていく空間に疲れ切っている人もたくさんいて、そこが地方への移住者の増加にもつながっていると思うんですけど。必要なのは、やっぱり愛媛のPRをしっかりするというのと、相談があったときにちゃんとしたフォローができるかどうかということが大事だと思います。そこで、今、愛媛県では東京にコンシェルジュで相談員を常駐させています。何かがあったらすぐフォローする。これは市町とも協力していますから、移住ということになれば住居の問題、就職の問題、あるいは1次産業への参入の問題、いろいろなアプローチがあると思いますので、こういった点についての相談を一手に引き受けるという体制を整えています。

それから、最近はネットをどう活用するかですから、昨年から“あのこの愛媛”という新しいサイトを立ち上げています。このサイトは、東京の民間会社と地元の金融機関と愛媛県がタイアップしてつくってしまっていて、愛媛県全体の地図が出てきて、今この町にはこの職種において、これぐらいの給料体系で勤務条件で何人の求人状況がありますというのが町ごとに出てくるようになってるんですね。登録していただければ。これはやがてビッグデータ化して、もっと有効に使っていく予定にしていますが、こことまた住居、空き家とかの情報とリンクさせることによって、一元的にそのサイトで移住希望者のさまざまな情報のキャッチアップができるというところまで進化させていく予定になっています。そこで、行きたいという人が現れたら、今度は例えば市町と協力して空き家情報とか住居の問題が出てきますから、そこには改修費の補助金。上限はありますが、空き家改修の移住の場合の改修の条件とか、いろいろなものがひっついてきますので。特に1次産業参入の場合は2年間のバックアップ体制もありますので、こうしたものも踏まえて定着にいたるまでのフォローというのも制度的に確立させていく。相談と情報キャッチアップとフォローと、この3つの充実を図ることが実際の移住者の獲得につながっていくのかなと思います。

ちなみに、3年前、愛媛県の移住者200人ぐらいでしたが、2年前が600人ぐらい、今年は1,000人ぐらいだったかな。

(企画振興部長)

1,000人超えました。

【知事】

1,000人超えた。どんどん増えていますので、しっかりとフォローしていきたいと思っています。

12. 関西方面で契約栽培している野菜の物流コストを下げる方法について

宇和島市三間町で農業を営んでいる。現在ミマメンファーマーズという4名ほどの農家グループを組んで、農業を子どもの希望にというコンセプトで頑張っている。先ほど知事からお話があった、人口が減少しているということで、宇和島市もどんどん減っており、マーケットもどんどん小さくなってきているので、今、関西のほうに野菜を契約栽培している。

そこで問題になってくるのは物流コストで、1袋60円の物に対して10円から15円の物流コストがかかると、なかなか採算ベースに乗っていきづらいところがあって、それをどうにかできないかという工夫を考えたところ、運送会社のチャーター便が一番安くできる、今の半値にできるということを聞いた。実際やっておられる農家さんもあるが、僕たちは小さい農家なので、4トン車をいっぱいにするような荷物がなかなかできなくて、異業種の方の荷物とか、魚とか瓶詰め加工品とか、そういうものを一緒にまとめて載せられないかなと考えている。

個人で動くと、全然情報が足らずうまく結び付けられていないところがあるので、県や市の情報の応援があればいい。またいい方法があれば教えていただきたい。

【知事】

市場としてやっぱり都会の市場を顧客としてつかまえるというのは、これまた大事なことだと思いますし、いい取引先と出会ったら安定した価格で取引ができるようになりますから、そういう意味では契約栽培という道が1つの選択として正しいのではないかと思います。最近、それに加えてネットを活用して例えばいっぱい田んぼとか持っていて、そこを切り売りするんです。ネット上で。オーナー制度です。オーナー制度とリンクさせているんです。オーナーは都会にいながらテレビカメラで自分の持ち分の畑がどうなっているのか。代行で生産していますから。その生産したものが届くようになるんです。その分、委託生産費は収入として入ってくるんですね。そういうことで成功している若手農業者もいたり、工夫によって地方にいながらいろいろな形態が生まれてきているんだなということを最近感じています。

今の物流の問題というのは本当に規模が大きくなればなるほど物流コストが安くなるのは自明の理なんだけど、なかなか小さいところで小回りが利くかと思ったら難しいのも事実だと思いますね。例えば、異業種との組み合わせによって荷物を大きく満載してコストを下げるというのも1つの手だと思いますし、もう1つは既存の大手の輸送便というのが常時走っていますよね。ひょっとしたらそこに空きスペースがあるかもしれないです。そういうところにぜひプラスアルファの収入としてうちも使わせてくれないかとか、そういうことも1つの選択肢なのかなという気もするんですね。何もみんなが小さいわけではなくて、定期便でしっかり動かしているところもあると思いますから、その空きスペースがもしあるならば、そこに便乗してしまうというやり方も1つ選択肢として考えられたらどうかというふうに思います。その情報が県に全部あるのかどうかはちょっと分からないですけど。どうですかね。

(南予地方局長)

研究はしてますけど。

【知事】

研究するそうです。そういうやり方も1つ頭に入れていただけたらいいのではないかと思います。

そうだ。特に野菜なんかは物によってはえらいい値段で取ってくれるところありますよね。関西や京都市場。

(南予地方局長)

そうですね。

【知事】

それだけいい物をつくるというのがまず前提で、ブランド化ができるかというところもあるん

だけど。どことは言わないですが、ある高原の農家さん。農業をやっている方ってもうかっているけどもうかっていますって言うてくれないからなかなか実態が掴めないんですよ。厳しいとしか言ってくれない。でも、ピーマンで一反 250 万上げていますよ。一反で。トマトで 300 万上がっています。言わないんですよ。絶対。京都の直営ですけども。もうかっている人はもうかっていますって言うてくれないと若い人が参入しません、というので、その呼び掛けを今しています。

それで作ったのが“えひめ農林水産人”というデータベースなんですね。これは「分かりました。言いましょ。」というので、私はこんなことをやっています、1日の生活はこんな形です、収入はこうです、って全部出ているんです。こういう成功例が若い人たちに伝わったら、1次産業でも十分やっつけられる、夢があるねって後継者が生まれて来るんだけど、今までは後継者がいない、いないと皆さん言うんだけど、そりゃそうですよ。もうからない、厳しい、厳しいとしか言わなかったら若い子は絶対見向きもしてくれないから、やっぱりもうかっているときはもうかっていますって言うていただけるといことがとても大事なことでないかなと思います。あの、ちょっとラボっていう形が特定されてしまうんですけど、例えば、県が持っている紙の関係の研究所は四国中央市にありますが、ここはもう企業の皆さんが会員になって、それを活用しながらつくったりですね、新技術の研究したりしています。それから、もう1つは繊維産業技術センター。これ今治なんですけど、これはタオル関係ですね。タオル関係この機械があって、それを自由に使って、会員さんが自由に使っていただけるような体制を整えて、今の今治タオルの裾野を広げてきた役割になってきました。ただ、それ以外の業種でそこまでの集積がないんで、専用ラボっていうのはないんですが、ただ、産業技術研究所なのでいろいろなアイデアに対して一緒になって研究をする。あるいは可能性を追求する、そういう仕組みは整っていますよね。まずはそこをちょっとたたいていただけたらなというふうに思います。

そこでいい製品が生まれて、本当にこれはいけるとなったら、今度はさっきのすご味って言いましたけども、スゴ技っていう企業データベースです。これはこういう技術、こういう特別な技術があるんだぞ、特別な商品開発しましたというものづくりの企業体の「スゴ技」データベース、今 180 社ぐらいエントリーしてくれています。もちろん全部が通るわけではないです。ここがすごいっていうのがあるものに、審査委員の方たちが厳選して、ここに記載するんです。これは通常の営業ツールになりますから、愛媛県が例えば、一部上場企業の門をたたいて、愛媛県スゴ技商談会をやりたいという仕掛けをするんですね。その会社に興味がある人にばーと言ったらその会社行ってみたいとか。

こういう小さい会社はまさに言われたように、一部上場企業の営業に行っても名刺すら受け取ってもらえないことがあります。ところが、愛媛県が後ろ盾になって愛媛の商談、ビジネス商談会やりますから、向こうも役員出てきます。役員が出てくるっていうことは、その営業部長たちみんな出てくるんです。そこでブースを設けてしっかりと商談に応じてくれます。ただし、そこは成約になるかどうかは、これはもう企業の努力になってます。ただ、その少なくとも門前払いされるようなことがないようにしようっていうのが、それはさっきの「スゴ技」データベースや「すご味」データベースを使った営業本部の活動ということになりますから、ぜひ、こういうことをやってるといことを知っていただいて、チャレンジをしていただきたいなと思います。

＜補足説明＞〔南予地方局〕

既存物流の空きスペースの活用を行う場合には貨物が混載されることとなりますが、混載に当たっては、温度帯が同一であること、匂いが他の貨物にうつらないこと、付着物等による他の貨物への汚れが発生しないことなど、取り扱い上の制約が多数存在するほか、定時定量の集荷や仕向地での各戸へのデリバリー体制まで確保する必要のあることなど、貨物、集荷、配送のそれぞれにおいて細かな制約がかかることが判明しました。

このため、地域の野菜農家や産直市など、取り扱う品目が同じ関係者が連携してロットを確保してチャーター便等を活用することも視野に入れながら物流の低コスト化を図る方策になるのではないかと考えております。

このほか、県産品等のPR等を通じて個々の業者の販売量の拡大によるロット確保に繋がるよう営業支援をしてまいりたいと考えております。

13. 愛南町での難易度の低い園地の整備及び南レクの未利用地の活用等について

愛南町のかんきつ専業農家で、8年前にUターンで就農した。18年ぶりに地元に戻ってきたが、愛南町のかんきつ業は18年前からほぼ変わっていない。農道とモノレールしか整備されておらず、60年前にブルドーザーで削った段畑のままというところが多い。

愛南町特産の中晩柑は樹高が高く、平気で3メートルぐらいになるが、むき出しの段畑で脚立を立てて団塊の世代のおばちゃんたちが収穫作業をしているのでなんとか持っている状態である。当然、作業性が悪いが、さらに現状を悪くしているのが耕作放棄地や、防風対策、杉林で防風林をしているものが20年放置されると高さ20メートルの杉林になる。そういうのが積み重なって、60年前にブルドーザーで削ったときは私の地区で200ヘクタールあったものが、今100ヘクタールになっている。当時は一面甘夏畑であったが、今は下から見ると雑木林、竹林、杉林が半分。残りの隙間にかんきつが見えている状態である。それを押し戻すのがほぼ不可能になってきており、このままでは、もう10年持たないのではないかと感じている。

4年ほど前に、町でもかんきつ園の環境の改革事業を立ち上げ、私も、最初からメンバーとして、誰でもできる難易度の低い園地を愛南町でも早急に確保しないと10年先、20年先、後の世代に残すものが残らないということをやっと言ってきた。田んぼには向いてなくてもかんきつ園地には向いているようななだらかな段畑がたくさんあるが、もちろん権利者の権利もあるし、周りの農家の意見や意向などもあり、土地の集約などはほとんど進んでいない。そこでこれが県としての農業政策の意向に沿っているかどうか分からなが、後押ししていただけることがあれば助けていただきたい。

静岡県の新丹谷地区というところで10数年前に高速道路のインターチェンジ沿いに26ヘクタール条件の悪い畑を大規模造成し、10年経ってそこが最先端の農地として実を結び始めてかなり注目を集めている。愛南町で20何ヘクタール一度に造成して受け入れるのは無理だとは思いますが、見切り発車ではないが、優良園地をつくってみて周りを見ていただかないと自分のところも買い取ってもらって売れという話にはなりにくいのではないかと思います。

町の事業の会議に参加し始めて、園地を探して歩いていたら、何カ所か放棄地というか空き地みたいなどころがあり、それを町の担当に確認すると、そのうち県の南レクの事業で凍結した分の未利用地が何カ所もあり、町内に百何十ヘクタール存在するという話である。もちろん優良園地に向いているようなところはほとんどないと思うが、今何か植えられている畑を変えるのは難しいので、県としてもそういう土地を利用させてもらえるようなことがあればお助けいただきたい。

【知事】

まず、静岡の話が出たんですけれども、静岡というのはかんきつも平たんな畑でつくっているケースが多いと思うんですね。ただ、本当においしいかんきつって、条件は悪いですが、例えば温州みかんなんかでも西宇和青果なんか元気なのは、本当に段畑で堂々と言っているのは、「この悪条件だからこそまいみかんができるんやと。なぜならば、上からの太陽と海からの照り返しの太陽と石垣からのさらなる照り返しの太陽と、3つが傾斜地であるが故にまんべんなく降り注ぐからこの味が出るんだ。」というのをガンガン売りにしているんです。そこでいい意味で真穴

と川上と日の丸が競い合うという現象が起こっているのですが。はっきり言って、この数年ものすごくもうかっています。この地域。言わないですけど。

愛南も何と言っても主力商品である河内晩柑の存在というのはものすごく大きくて、全国の7割ぐらいのシェアを持っているんですね。ちょうどこの中晩柑が終わる時期に5月、6月に出てくるのが河内晩柑だと思うんですけど、これも昔のいきさつでしょうけど、名前がみんな違うんですよね。美生柑であったり、愛南ゴールドであったり。1回、僕が売りやすくするために統一してくれてゆっても、なかなか難しいらしいですね。なかなか地域ブランドに統一できないという事情があるようなんですが、それはそれでしょうがないなど。ただ、これは端境期に出てきて、ちょうど暑くなってくると酸味が欲しくなってくる。それにぴったりとフィットしているという品種なので、これはほかの地域では見られないかんきつ生産になっているなどと思っていました。確かに傾斜地より平地のほうが楽は楽なんですけど、ただその商品価値と収益性を考えれば、さっき言ったように収益が上がるんだよということになれば若い人だって見向きしてくれると思いますし、作業する体力が十分ある。

ただ、問題は農地の集約は本当に進んでいないんです。進めてくださいというのは県としてはずっと言い続けて、それに対するバックアップ制度も出しているんですけど、これはかんきつに限ることなく農業全般に言えることですが、なかなか土地は手放さない。貸すことも嫌だという状況が土地本位主義という中で培われた意識だと思うんですけど。貸すんだったらいいんじゃないですか僕らは思うんですけど、そこも進まないというのが現実だと思います。ただこれは諦めるわけにはいかないので、ぜひ愛媛県の産業として将来性を考えて地域の仲間たち、あるいは若いいきのいい人たちに貸すということはぜひ検討していただきたいと思っています。

最近、むしろ農業女子の方も増えてきていまして、今、その軍団もつくってくれて“さくらひめ”という。彼女たちにはどこか農地持っている旦那さんを見つけて乗っ取っちゃまえて言っているんだけど、それぐらいのいきのいい人たちも出てきていますので、そういう若い人たちも門戸を広げていただけたら可能性は生まれてくるのではないかと思います。

もう1つは法人化という道。これは県のほうでアドバイスしていますけれども、例えばある地域、農園を法人化したところがあって、ここは野菜が中心なんだけど生産もし、その後の加工まで手を広げました。なかなか面白いことを考えるなど思ったんですが、今の御時世を読み切って、例えばタマネギを1個丸々で売ると、例えば100円ぐらいだとします。例えですよ。これを半分に割って市場に出したら140円になるんです。4分割すれば180円になるんです。8分割すれば250円なんです。そこに目をつけてカットする機械を入れたんです。8分割で全国で売り始めたんです。で、大成功しています。今、従業員70人ぐらいいるんじゃないかな。若い人ばかりです。そういうふうなやり方も1つのアイデアかな。かんきつとは別の世界ですが、法人化になるとそういった事業化も可能になって、1人の生産者としての物の見方からのアイデアと法人化というふうなことを考えた上での物の見方のアイデア。また違った次元も出てくると思うので、そんな目でもう1回見つめていただければと思います。そこに至るまでのアドバイスとか、制度は県もすでに持っていますから、そこは活用されたらいいのではないかと思います。

未利用地は分かる？

(南予地方局長)

南レク公園、社会経済情勢の関係でまだ未整備の箇所があります。そこは未利用地をイノベーション事業とって、県民の方からまだ整備されていないところを公募で提案を募集させていただいて、そういった中から例えば緑地の事業さんが何か緑化の事業の畑にしてみたり、いろいろな提案をいただいて、そこから採択して利用していただいているケースになります。それは県有地なんですね。多少、県が買収できていない部分の虫食いの部分はなかなかそういったことはできないのですが、県有地で未利用地で一定の範囲があれば県民の皆さんからの提案を採用させて

いただいておりますという事業もありますので、ぜひ御利用いただければと思います。

14. 男女共同参画社会等について

ここに参加して皆さんの話を聞くだけで非常に勉強になった。また、知事の素晴らしい政策などを学ばせていただいた。明日は男女共同参画社会の講演があり、そういうものにも参加させていただく。

【知事】

今、たまたま男女共同参画というお話がありましたが、これは働く女性、特に女性の方の意識がどんどん変わっていっているので社会参加、就業ということに関しては性差の差別なく受け入れる社会になっていかないといけないというのが1点と。もう1つは実は働き方改革の中での議論なんです、少子化問題と直結しているテーマだと思っています。

先ほど、冒頭で少子化の問題にちょっと触れさせていただいたのですが、出生率を上げるために出会いの機会、婚活事業をやっているというのは意味があって、アンケートを取ったんです。若い人たちのアンケートで晩婚化が進んでいく中で何が原因だと思いますかというアンケートで一番多かったのが出会いの機会がない。これが圧倒的多数を占めたので、そこで婚活事業ということに入れたんです。

これも最初はなかなかうまくいかなくて、そこでわかっていたのがマッチングをしっかりしないとうまくいかないんだなというのがわかってきたんです。そこでビッグデータを活用するようになったんです。例えば、ここにある人がいて、この人が5対5ぐらいだったら自己主張ができるけど、大きなパーティではしゃべらなくなっちゃうとか。こっちの方は1対1だったら自己主張できるけど、複数いると全然しゃべらなくなっちゃう。性格によっていろいろ違いがある。そこをビッグデータの中でマッチングさせていったんです。すると、カップル成立率がどんどん上がっていくんです。

すでに9年間で愛媛県の婚活事業で生まれたカップルが1万2,000組になりました。そこから結婚しましたと県に報告があった件数も900組ぐらい出ています。連絡がない人たちもいますので。これがやがてどんどん効いてくると思うんです。

もう1点のアプローチが実は男女共同参画と関わってくるのですが、イクボスとか。愛媛県ではひめボスと言っていますが、要は旦那さんが積極的に育児、家事に協力するという、これも共同参画社会ですよ。これもなんでここまで言われるようになったかという、これもデータがありまして、昔型の育児・家事、何も旦那さんが協力しない御夫婦と積極的に御主人が育児・家事に協力している御家庭と子どもさんの人数が倍半分違うんです。これは驚きました。強制はできないですが、本当にきれいに数字が出てきているんです。育児・家事に男性も協力することが、出生率の上昇につながるんだろうということで今、いろいろなところで呼び掛けを始めているんですが、そんな観点から男女共同参画なんかも考えていただけたらなと思います。